

# ヴァーツヤーヤナ、ウッディヨータカラと 世親の『唯識二十論』『俱舍論』(下)

森 山 清 徹

〔抄 録〕

先の論考(上)でニヤーヤ学派のヴァーツヤーヤナは世親の『唯識二十論』(Vś) k. 12を論難していることを表わした。この(下)ではニヤーヤストラ(NS) 4-2-28から4-2-37に至る注釈(NBh)のなかで唯識無境説を論難しニヤーヤ学説を論じていることを明らかにしようとする。それに加えウッディヨータカラの広注(NV)における論難は終始一貫している。それは外界の対象が存在しない場合、起こり得る問題点の指摘である。世親説 Vś k. 17cd では外界の対象は存在しないから夢を見ているときの知と目覚めているときの知とは区別されない。したがって目覚めたときの無知覚(anupalambha, anupalabdhi)は外界の対象の有によって確定し得ない。これは知覚し得る実在に関してその無知覚も成立し得ることをいっているものと考えられる。この意味では、ダルマキールティに先立ってヴァーツヤーヤナは無知覚の確定の理論を提示しているといえよう。また正しい知と誤った知との根拠として普遍(sāmānya)の実在と生起因(nimitta)とを提示し、これらを認めない唯識派世親にはそれら両知の根拠がなくプラマーナと認識対象とが夢を見ているときの対象のように構想されたものであるということとはできないと論難する。さらにウッディヨータカラは心心所同体論批判として唯心論と五蘊論との矛盾を、また Vś k. 7を取り上げ善不善の業果の不成立及び知識が区別されないことを指摘し広範な論難に及んでいる。

**キーワード** 世親、『唯識二十論』、唯識無境、ヴァーツヤーヤナ、ウッディヨータカラ

ニヤーヤ学派のヴァーツヤーヤナは世親の『俱舍論』における総体としてか部分としてかの二面からの全体(avayavin)と部分(avayava)との和合(samavāya)批判及び色、形の原子(極微)論、五識身(感官知)は原子の積集を対象とするという学説を知っていたと見られ、またウッディヨータカラに先立って『唯識二十論』(Vś) k. 12の一多の点からの諸原子の結合批判を知っていて、NSを注釈する中でそれらを取り上げ論難していることをこれまでに発表

してきた<sup>(1)</sup>。以下では、さらに諸部分とは別個な単一な全体（avayavin）説批判を表す Vś k. 11や、出世間的知を得て目覚めたとき外界の対象の無を悟ることを夢を見ているときの対象の非存在を悟ることとして論じる Vś k. 17などを取り上げニヤーヤストラに注釈を施していることを把握しようとする。このことからヴァーツヤーヤナらが、世親による唯識無境説を論破しようとしていることを明らかにし、両者の見解の相違を究明したい。なお、ニヤーヤストラの成立については、第一章と第五章とはナーガールジュナ以前、第二、三、四章はナーガールジュナ以後と見られている<sup>(2)</sup>。

## 1. NS4-2-28から4-2-37に至るヴァーツヤーヤナの Nyāyabhāṣya (NBh) とウッディヨータカラの Nyāyavārttika (NV) との梗概

1-1. 上の〔抄録〕に示した目的と要点の究明を表すにつき、以下に、まずヴァーツヤーヤナとウッディヨータカラとが Vś を取り上げ論議していることの梗概を上げておく。

### 〔6〕 NS 4-2-28 〈部分と全体との関係〉

世親が Vś k. 11及びその注釈で一多の点から諸部分（avayava）と別な単一な全体（avayavin）は把握されないとして全体批判を表すに対して、和合（samavāya）<sup>(3)</sup>という点からニヤーヤ学派は糸（部分）と布（全体）とは因果関係（kāryakāraṇabhāva）すなわち依存するものと依存されるものの関係（āśrayāśritabhāva）にあるから分離することはできず別々に把握されないと論じる。

### 〔7〕 NS 4-2-29 〈プラマーナによって全体の認識がある〉

プラマーナによって部分と和合した全体が認識される。

### 〔8〕 NS 4-2-30 〈プラマーナによって存在の成立不成立の確定がある〉

〈プラマーナに妥当しても妥当しなくてもすべてのものは存在しないということは不合理である〉プラマーナが存在するから、すべてのものは存在しないということはある得ない。

### 〔9〕 NS 4-2-31 〈夢を見ているときの対象のようにプラマーナと認識対象とが構想される〉

世親は Vś k.16ab で直接知覚は夢を見ているときのように起こると述べる。このことが論議にのぼっていると考えられる。ヴァーチャスパティミシュラは、〔8〕に対する〔9〕を唯識派（Vijñānavādin）の見解として以下のことを表している<sup>(4)</sup>。プラマーナと認識対象との関係は無始以来の習気を原因とする概念知（anādivāsanānibandhanakalpanā）に依存する。またそれらの関係を世俗（sāmvṛtti）的なものとし、諸の知は勝義的存在（paramārthasat）である。〔7〕～〔9〕（← Vś k. 16ab）

〔10〕 NS 4-2-32 〈幻、空中の想像上の都市、陽炎のようにプラマーナと認識対象とが構想される〉

先の〔9〕と同様、唯識派の見解と見られる。（← Vś k. 3ab）

〔11〕 NS 4-2-33 (1) 〈夢を見ているとき対象を構想するように、あるいは幻などのように

ブラマーナと認識対象とが構想されるという唯識派の主張には因 (hetu) が存在しない。世親は Vś ad k. 17 で夢を見ているときの対象が非存在であることを目覚めていない人は理解しないが、概念構想のない出世間的知 (lokottaranirvikalpajñāna) を得て目覚めた人はその後、得られる清浄な世間的知 (śuddhalaukikajñāna) により、それを理解することを述べている。他方、ヴァーツヤーナは知覚されることから有が存在するなら、知覚されないことから無が成立すると表明している。これは知覚し得るものに関して、その無知覚が成立し得ることをいっている。このことは世親にとっては、夢を見ているときも、出世間知により目覚めたときも共に外界の対象は無であるから、實際上、外界の対象は知覚されないから、その否定も成立しないと論難していることになる。したがって、ダルマキールティが無知覚 (anupalabdhi)<sup>(5)</sup> を知覚可能なものに関して成立すると規定したことに先行して、ヴァーツヤーナは無知覚の成立根拠を提示しているといえよう。また世親は外界の対象の表象の顕現は習気 (vāsanā) による種子 (bīja) に基づくという考えを同じく Vś k. 17cd の注釈で、また k. 9ab で表している。これは事実上ダルマキールティが実在に基づかない知覚し得ないもの、例えばブラダーナなどを無始以来の習気 (anādivāsanā) による概念として扱い、それを無知覚因により否定し得るとする理論を樹立するのに連なるものと考えられる。なお、表象のみであることを夢を見ているとき、出世間的な知に目覚めたときとを対比させ論じること、他の幻などの喩例と共に、また種子説も無着の『摂大乘論』2. 6 などに見られるが、全体批判、原子批判と一連のものとして外界の対象の無、表象のみを論じる点でヴァーツヤーナらにより論難されているのは、世親の Vś であると考えられる。

[12] NS 4-2-34 <夢を見ているときの対象と唯識無境説に関する問題点>

世親は Vś k. 17ab で知覚された対象を記憶するということは成立せず、かえって自己の種子 (svabīja) から知覚表象が生起し、それから記憶が起こる (Vś k. 9ab) と主張するに対して、ヴァーツヤーナは夢を見ているときに対象を構想することは、生起因 (nimitta) すなわち実在としての原因に基づくとし、記憶 (smṛti) と観念 (saṅkalpa) のように以前、目覚めているときに知覚した対象 (pūrvopalabdhaṣaya) に基づくとし、夢を見ているときと目覚めているときの区別がないとする者 (世親) にとって、夢を見ているとき対象を構想するようにと論じることは無意味であると論難する。またそれでないもの (杭) に関してそれ (人) であると判断することは対応物 (pradhāna) すなわち、かつて知覚経験した実在としての人に依存すると論じる。(← Vś k. 17)

[13] NS 4-2-35 <誤った知は実在としての原因なし (animitta) に起こるのではない>

目覚めたときに知の働きによって夢の中で対象を構想したことは退けられるが、杭を人であると誤って判断する場合と同様、両者に存在する対象としての普遍な特徴 (sāmānyalakṣaṇa) は退けられない。また遠近の区別により対象の認識の真偽は起こる。誤った知も存在 (bhāva) から起こり、幻、空中の想像上の都市、陽炎などに関する誤った知識は外界の質糧因 (upā-

dāna) を有する。(← Vś k. 17cd)

[14] NS 4-2-36 <誤った知にも実在としての原因が存在する>

対象〈外界の対象〉のみならず誤って知ること (mithyābuddhi) 〈識〉も、ヴァーチャスパティミシュラによれば、中観派は外界の対象のみならず知も否定するが、実在としての原因（生起因、nimitta）が存在するから知 (buddhi) も対象 (artha) も存在する。

[15] NS 4-2-37 <プラマーナと認識対象とに関する論議>

ヴァーツヤーヤナによれば、杭を人と見誤ることは、杭と人ともに普遍相があるからであり、また誤って知ること (mithyābuddhi) には、実際の対象 (tattva) とその対応物 (pradhāna) とがある。他方、実際の対象と対応物との二種の知及び普遍を認めない者（仏教徒）には見誤ることがなく真実の対象だけを見ることになるから、プラマーナと認識対象とは夢を見ているときの対象の如く誤りであるといえない。

1-2. 以下はウッディヨータカラ (NV) のみに直接、指摘されるものである (NV *ad* NS 4-2-33, 34)。それは世親の Vś における唯識無境説に関するより直接的な論難である。

[11B (1)] NS 4-2-33 (1) <夢を見ているとき対象が構想されるという主張にとって因 (hetu) は何か>

夢を見ているとき対象を構想するように、あるいは幻などのようにプラマーナと認識対象とが構想される (NS 4-2-31, 32) という主張には因 (hetu) が存在しない。それに対して因は顕現 (khyāti) であるという対論者の弁明を取り上げ、顕現も夢の場合と同じく外界の対象の無においていわれているので因とはならないと論難する。世親は Vś k. 17ab で、外界の対象が非存在であることの根拠として知における顕現 (ābhāsa) を上げる。ウッディヨータカラは、それを取り上げていると考えられる。

[11B (3)] NS 4-2-33 (3) <心心所の同体別体に関する論議>

世親は Vś k. 1 で唯識無境を説明して、その際の心とは結合（受など）を具えた心 (cittam atra saṁprayogam) であるとし、心心所同体であるとの主旨を表明している。それに対し、ウッディヨータカラは楽と苦（心所）とは認識されるもの (grāhya) であり、知（心）は認識するもの (grahaṇa, grhīti) であることを根拠に、楽、苦と知 (jñāna) とは別であるという心心所別体論により論難している。また心 (citta) とは識 (vijñāna) であるから、識のみ (vijñānamātra) であれば、精神的なものを四種（受、想、行、識）に分類した教理（五蘊論）と矛盾すると指摘している。他方、ダルマキールティは PV III (251) (252) (255) で楽と苦とは知（心）と原因（感官、対象、注意力）が同じであるから心心所同体であることを論じ、楽、苦と知とは認識されるものと認識するものとの関係にないことを感官知は楽などを認識することはないとする。それは世親が唯識無境説に立つのとは異なるが、共に心心所同体論に立つ。(← Vś kk. 2, 3ab)

[12B (1)] NS 4-2-34 〈夢を見ているときの対象と唯識無境説とに関する対応物 (pradhāna) の問題〉

それでないものをそれであると知ることを形象 (ākāra) と対応物である [外界の] 実在 (pradhānavastu) との類似性 (sāmānya) に基づくとする。心以外の対象を認めない人 (世親) は夢を見ているときと目覚めているときとの区別が成立しない。(← Vś kk. 17ab, 9. 上の [12] 参照)

[12B (2)] NS 4-2-34 〈唯識無境説と善、不善の結果の問題〉

夢を見ているときの知覚と目覚めているときの知覚とを区別しないなら、善、不善の確定が成立しない。他方、世親は Vś k. 18cd で夢を見ているときは、心が眠気により不活発であるからとしている。それに対しウッディヨータカラは対象が存在しない場合、知 (jñāna) の明瞭さと不明瞭さとの区別の根拠を詰問している。

[12B (3)] NS 4-2-34 (3) 〈唯識無境説と知識の区別の問題〉

NV *ad* NS 4-2-33, 34では外界の対象が存在しなくとも知識の区別 (vijñānabheda) が見られることを等しい行為の果報 (異熟) を生起した餓鬼達は膿みに満ちた河を見ることにより表している。これは世親の Vś k. 3に一致するものである。その際、ウッディヨータカラは外界の対象が存在しない場合、知識の区別や業果があり得ないことを論じるべく知が血や膿みの形象をもつなら、何からその形象 (ākāra) が起こるのかを問うている。すなわち、その対応物 (pradhāna)、彼にとっては、外界の対象がなくてはならないというのである。また、Vś k. 7 ab が引用され、k. 7cd にも言及し行為とその結果は認識の相続 (vijñānasamāntāna) においてあるとする世親に対して、ウッディヨータカラは行為とその結果はアートマンにおいてあるとする。続いて彼は外界の対象が存在することを論ずるべく種々の因による推論を立てる。これをシャーンタラクシタ、カマラシーラは「外界の対象の考察章」TS v. 2056及びその注で取り上げ、それらの因は不定 (anaikāntika) であると論難し、PV III (1) をも根拠にし唯識無境であることを立論している。このことは、世親の Vś k. 7に関するウッディヨータカラの反駁、それに対してTS、TSPでシャーンタラクシタ、カマラシーラは結果的に世親説を擁護している。ここに後期中観思想形成の一面が知られる。

以上は、世親とニヤーヤ学派との外界の対象を巡る〈無と有との論争〉である。

## 2. NS 4-2-28から4-2-37に至るヴァーツヤヤーナの注釈 (NBh) とウッディヨータカラの広注 (NV) との和訳研究

[6] 全体 (avayavin) と部分に関する論議

[6A] NBh. pp. 1074, 4-1075, 3 *ad* NS 4-2-28

tadāśrayatvād aprthaggrahaṇam // 28 // kāryadravyaṁ kāraṇadravyāśritam tat kāraṇe-



bhyaḥ pṛthag nopalabhyate, viparyaye pṛthag grahaṇāt, yatrāśrayāśritabhāvo nāsti tatra pṛthag grahaṇam iti / buddhyā vivecanāt tu bhāvānām pṛthag grahaṇam atīndriyeṣv aṇuṣu, yad indriyeṇa gṛhyate tad etayā buddhyā vivicyamānam anyad iti // 28 //

[全体は] それら（諸部分）に依存しているから、[全体は諸部分とは] 別に把握されない（NS 4-2-28）。

[ヴァーツヤーヤナによる答論] 原因としてのドラヴィヤ（諸部分）によって依存されているものが結果としてのドラヴィヤ（全体）である。それ（結果としてのドラヴィヤである全体）は諸原因（諸部分）とは別に認識されない。そうでないなら、別々に把握されるから。依存するものと依存されるものとの関係（āśrayāśritabhāva）が存在しない場合、別々に把握される。他方、知による区別から、超感覚的である諸原子に関して諸存在は別々に把握される<sup>(6)</sup>。感官によって把握されるものは、この知によって区別される [超感覚的である諸原子（部分）とは] 別なものである。

[6B] NV pp. 1074, 13-1075, 10 *ad* NS 4-2-28

yat punar etat yadi tantuvyatiriktam paṭādidravyaṁ syāt tantuṣu buddhyā vivicyamāneṣu pṛthag upalabhyeteti tadāśrayatvād apṛthaggrahaṇam (NS 4-2-28) / kāraṇadravyāśritam kāryam tasmāt na pṛthag upalabhyata iti / viparyaye hi pṛthag grahaṇāt yatra kāryakāraṇabhāva āśrayāśritabhāvaś ca nāsti tatra pṛthag grahaṇam iti // 28 //

[反論] また、次のことが起ころう。この糸（部分）と別なものが布（全体）などのドラヴィヤであるなら、知によって諸の糸が吟味されるとき別個に [布は] 認識されよう [しかし、別個に認識されることはない]。

[ニヤーヤ学派による答論] [全体は] それら（諸部分）に依存しているから [全体は諸部分とは] 別に把握されない（NS 4-2-28）。原因というドラヴィヤによって依存されるもの（āśrita）が結果である。したがって、別々に獲得されないというのである。なぜなら、そうでない場合には、別々に獲得されるから、因果関係（kāryakāraṇabhāva）と依存するもの（原因）と依存されるもの（結果）との関係（āśrayāśritabhāva）とがない場合には [全体と部分とは] 別々に把握される。

[7] プラマーナによって部分と和合している全体の認識がある

[7A] NBh. p. 1075, 4-8 *ad* NS 4-2-29

pramāṇataś cārthapratipatteḥ // 29 // buddhyā vivecanād bhāvānām yāthātmyopalabdhiḥ, yad asti yathā ca yan nāsti yathā ca tat sarvaṁ pramāṇata upalabdhyā sidhyati (→ NV p. 1075, 11-12 *ad* NS 4-2-29), yā ca pramāṇata upalabdhis tad buddhyā vivecanam bhāvānām, tena sarvaśāstrāṇi sarvakarmāṇi sarve ca śarīriṇām vyavahārā vyāptāḥ / parīkṣamāṇo hi

buddhyādhyavasyati idam astidaṁ nāstīti tatra na sarvabhāvānupapattiḥ // 29 //

また、プラマーナによって [部分と和合している全体としての] 対象の認識があるから (NS 4-2-29)。

[ヴァーツヤーナによる答論]

知によって吟味することから諸存在の本性を認識することがある。どういう仕方で存在するか、またどういう仕方で存在しないかということの全てはプラマーナに基づいて認識されることにより成立する。またプラマーナに基づいた認識、それが諸存在を知によって吟味することである。そのこと (プラマーナに基づいた認識) は、すべての聖典、すべての運動、諸の生物のすべての行為に及ぶのである。なぜなら、知によって吟味している人は、これは存在する、これは存在しないと確定する。その場合、すべての存在があり得ないということはない (プラマーナによって確定されるものは存在する)<sup>(7)</sup>。

[7B] NV p. 1075, 11-12 *ad* NV 4-2-29

pramāṇataś cārthapratipatteḥ (NS 4-2-29)/yad asti yathā ca yan nāsti yathā ca tat sarvaṁ pramāṇata upalabdhyā sidhyatīti (=NBh. p. 1075, 5-6)/śeṣaṁ bhāṣye // 29 //

また、プラマーナによって [部分と和合している全体としての] 対象の認識があるから (NS 4-2-29)。どういう仕方で存在するか、またどういう仕方で存在しないかということの全てはプラマーナに基づいて認識されることにより成立する。残りは NBh. に [明らかである]。

[7B-1] NVT p. 1075, 20-23 *ad* NS 4-2-29

saṁpratyaīndriyake 'py avayave 'vayavino vivicyamānasya yāthātmyena pṛthag grahaṇam āha pramāṇataś cārthapratipatteḥ (NS 4-2-29) iti // yad asti paṭādikam avayavi dravyaṁ, yathā ca svāvayavasamavetatvena guṇādhāratayā ca, yan nāsti śaśaviṣāṇādi, yathā ca kāryakāraṇabhāvena, tat sarvaṁ pramāṇata upalabdhyā sidhyati / sugamaṁ bhāṣyam // 29 //

部分 (avayava) が正しい感官を具えている場合にも、全体 (avayavin) が吟味されているけれども、本性によって別々に把握される。[以下に] 言われている。

また、プラマーナによって [部分と和合している全体としての] 対象の認識があるから (NS 4-2-29)。布などの全体 (avayavin) なるドラヴィヤなるものが存在する。例えば、また自己の部分 (svāvayava) と結合している性質 (samavetatva) の故に、またグナの基体性 (ādhārātā) を有する故に [全体なるドラヴィヤが存在する] 兎の角などのものは存在しない。例えば、また因果関係によって [全体は存在する]。その全てはプラマーナによって認識される故に成立する。[それは] NBh. が明らかにしている。

[8] プラマーナによって存在の成立不成立の確定がある

[8A] NBh. p. 1076, 2-6 *ad* NS 4-2-30

pramāṇānupapattyupapattibhyām // NS 4-2-30 // evaṃ ca sati sarvaṃ nāstīti nopapadyate, kasmāt pramāṇānupapattyupapattibhyām / yadi sarvaṃ nāstīti pramāṇam upapadyate, sarvaṃ nāstīti etad vyāhanyate / atha pramāṇam nopapadyate, sarvaṃ nāstīti asya katham siddhiḥ atha pramāṇam antareṇa siddhiḥ, sarvaṃ astīti asya katham na siddhiḥ // 30 //

プラマーナに妥当しないことと妥当することとの故に（NS 4-2-30）。

また以上の通りである場合、全てのものは存在しないというのは妥当しない。

[反論] 何故であるか。

[答論] プラマーナに妥当しないことと妥当することとの故に<sup>(8)</sup>（NS 4-2-30）。もし、全てのものが存在しないということがプラマーナに妥当するなら、[プラマーナは存在するから] 全てのものが存在しないというこのことは損なわれる。もし、全てのものが存在しないということがプラマーナに妥当しないなら、そのこと（全てのものが存在しないという否定）が、どうして成立しようか。もし、プラマーナなしに成立するなら、[正否を問わず成立することになるが] 全てのものは存在するというこのことが、どうして成立しないであろうか。

[9] [10] 夢を見ているとき、あるいは幻などのようにプラマーナと認識対象とが構想される

[9A]<sup>(9)</sup> [10A] NBh. p. 1076, 7-10 *ad* NS 4-2-31, 32

svapnaviṣayābhimānavad ayaṃ pramāṇaprameyābhimānaḥ // 31 // yathā svapne na viṣayāḥ santy atha cābhimāno bhavati, evaṃ na pramāṇāni prameyāṇi ca santy atha ca pramāṇaprameyābhimāno bhavati // 31 // māyāgandharvanagaramrgatrṣṇikāvad vā // 32 //

[唯識派の主張] 夢を見ているとき対象が構想されるように、このプラマーナと認識対象とが構想される（NS 4-2-31）<sup>(10)</sup>。

例えば、夢を見ているとき、諸対象は存在しない<sup>(11)</sup>。それにもかかわらず、[汝はプラマーナと認識対象とを實在であると] 構想する<sup>(12)</sup>。そのように諸のプラマーナと諸の認識対象とは [實在として] 存在しない。それにもかかわらず、[汝によって] プラマーナと認識対象とが構想される（NS 4-2-31）。あるいは、幻、空中の想像上の都市、陽炎のように<sup>(13)</sup> [プラマーナと認識対象とが構想される]（NS 4-2-32）。

[8B] [9B] [10B] NV p. 1076, 12-15 *ad* NS 4-2-30, 31, 32

pramāṇānupapattyupapattibhyām（NS 4-2-30）/ svapnaviṣayābhimānavad ayaṃ pramāṇaprameyābhimānaḥ（NS 4-2-31）/ māyāgandharvanagaramrgatrṣṇikāvad vā（NS 4-2-



32)/ yathā svapne viṣayā na santi atha ca viṣayābhimānaḥ, evaṁ na pramāṇāni na prameyāṇi santi atha ca pramāṇaprameyābhimānaḥ (NBh. p. 1076, 8-9 *ad* NS 4-2-31)// 30-32 //

プラマーナに妥当しないことと妥当することとの故に [全ての存在が妥当しないのではない]  
(NS 4-2-30)

[唯識論者による反論] 夢を見ているとき対象を [実在であると] 構想するように、このプラマーナと認識対象とが構想される (NS 4-2-31) あるいは、幻、空中の想像上の都市、陽炎のように [プラマーナと認識対象とが構想される] (NS 4-2-32)。例えば、夢を見ている時、諸対象は存在しない。それにもかかわらず、対象が考えられる。そのように、[真実には] 諸のプラマーナも存在せず、諸の認識対象も存在しない。それにもかかわらず、プラマーナと認識対象とを構想する<sup>(14)</sup>。

[8B-1] [9B-1] NVT p. 1076, 17-23 *ad* NS 4-2-30, 31

yad uktam pramāṇopapattyanupapattibhyām (NS 4-2-30) na sarvabhāvānupapattir iti, tatra pratyavatiṣṭhante vijñānavādī svapnaviṣayābhimānavad ayaṁ pramāṇaprameyābhimānaḥ (NS 4-2-31)// na khalu vāstavaḥ pramāṇaprameyabhāvaḥ, kiṁ tv anādivāsānānibandhanakalpanādhīnaḥ / yathā hi na svapne santi viṣayā atha ca pratibhānti kalpanā-mātreṇa, tathā ca sāmvyūttanāparamārthasatā pramāṇaprameyabhāvena bāhyārthaśūnyatā sidhyati paramārthasatī pratyayānām, drṣṭā mithyāpratyayānām api tattvapratipatti-hetutety āveditaṁ purastād ity arthaḥ/ tad vyācāṣṭe vārttikakāraḥyathā na svapne viṣayāḥ santīti (NV p. 1076, 14)// 30-31 //

プラマーナに妥当しないことと妥当することとの故に (NS 4-2-30)。全ての存在が妥当しないということがいわれたのではない。その場合、唯識論者 (Vijñānavādin) が反論する。夢を見ているとき対象を構想するように、このプラマーナと認識対象とが構想される (NS 4-2-31)。実際、プラマーナと認識対象との関係は真実のものではない。そうではなくて無始以来の習気を原因とする概念知 (anādivāsānānibandhanakalpanā) に依存しているものである。なぜなら、例えば、夢の中で諸の対象は存在しない、それにもかかわらず [諸の対象は無始以来の習気を原因とする] 概念知だけによって顕われる<sup>(15)</sup>、それと同様に、勝義的な存在ではない世俗としてのプラマーナと認識対象との関係によって外界の対象は存在しないことが成立する。諸の知に勝義的存在がある。誤った諸の知 (夢を見ているときの対象知) にも真実の知の原因性 (プラマーナと認識対象との関係) が見られるということが先に知らしめられたことの意味である。そのことを注釈者 (ウッディヨータカラ) は [唯識派 (世親) の考えを] 以下の通り表している。例えば、夢を見ているとき諸の対象は存在しないように<sup>(16)</sup>。

[11] 夢を見ているときのようにプラマーナと認識対象とが構想されるという唯識派の主張には出世間知により目覚めたときに外界の対象が知覚されないことを確定し得る因 (hetu) が存在しない

[11A (1)] 夢を見ているときの対象の因に関する問題

NBh. p. 1077, 2-5 *ad* NS 4-2-33 (1)

hetvabhāvād asiddhiḥ // 33 // svapnānte viṣayābhimānavat pramāṇaprameyābhimāno na punar jāgaritānte viṣayopalabdhivad ity atra hetur nāsti / hetvabhāvād asiddhiḥ (NS 4-2-33) / svapnānte cāsanto viṣayā upalabhyante ity atrāpi hetvabhāvaḥ /

[ニヤヤー学派の主張] 因が存在しないから [汝の主張は] 成立しない (NS 4-2-33)。

夢を見ているとき対象を構想するようにプラマーナと認識対象とが構想される<sup>(17)</sup>、[出世間知により] 目覚めているとき対象を認識するようにはではない<sup>(18)</sup>という [唯識派の主張] には [外界の対象が知覚されないことを確定し得る] 因 (hetu) が存在しない。因が存在しないから、汝の主張は 成立しない (NS 4-2-33)。また夢を見ているとき、存在していない諸の対象が認識されるというこのことにも因が存在しない。

[11A (2)] 目覚めているときの無知覚は成立しない

NBh p. 1078, 2-6 *ad* NS 4-2-33 (2)

pratibodhe 'nupalambhād iti cet / pratibodhaviṣayopalambhād apratiṣedhaḥ / yadi pratibodhe 'nupalambhāt svapne viṣayā na santīti. tarhi ya ime pratibuddhena viṣayā upalabhyante upalambhāt santīti / viparyaye hi hetusāmarthyam / upalambhāt sadbhāve saty anupalambhād abhāvaḥ siddhyati, ubhayathā tv abhāve nānupalambhasya sāmarthyam asti, yathā pradīpasyābhāvād rūpasyādarśanam iti, tatra bhāvenābhāvaḥ samarthyate iti // 33 //

〈目覚めている人によって外界の対象が知覚されないという無知覚の問題〉

[反論] 目覚めたときに [対象は] 知覚されないから [夢を見ているときの対象は存在しない]<sup>(19)</sup>

[答論] 目覚めたときに対象は知覚されるから [外界の対象の] 否定は存在しない。もし、目覚めたときに [対象は] 知覚されない (anupalambha) から夢で見た諸対象は存在しない<sup>(20)</sup>

[ (宗) 夢で見た対象は存在しない。 (因) 目覚めたときに知覚されないから。 (喩) 知覚されなければ、存在しない。 ] ということであるなら、そのとき、目覚めることによって知覚されるこれらの諸対象は知覚されるから存在する (目覚めているときに知覚されないものは存在しない)。なぜなら因 (目覚めているときの無知覚) の効力 (sāmarthya) は反対の事柄 (知覚し得る存在) に関して (viparyaye) あるからである。知覚されることから有 (sadbhāva) が存在する場合、知覚されないこと (無知覚) (anupalambha) から無 (abhāva) が成立する<sup>(21)</sup>。

他方、(夢を見ているとき、あるいは目覚めているとき) 何れの場合も〔等しく〕(対象が) 存在しないなら、〔目覚めた人の〕無知覚 (anupalambha) には〔非存在を証明する因としての〕効力が存在しない<sup>(22)</sup>。例えば、灯火が存在しないことから色が見られないようにということは、その場合、〔灯火の〕存在によって〔色が存在すれば、見られるが、見られなければ色の〕無が知らしめられる<sup>(23)</sup>。

[11B (1)] 夢を見ているとき対象が構想されるという主張にとって因 (hetu) は何か  
NV pp. 1077, 7-1078, 8 *ad* NS 4-2-33 (1)  
hetvabhāvād asiddhiḥ (NS 4-2-33)/ smṛtisaṅkalpavac ca svapnaviṣayābhimānaḥ (NS 4-2-34)/ māyāgandharvanagaramṛgaṭṛṣṇikāvad veti (NS 4-2-32, NBh. p. 1087, 8) na, pramāṇābhāvāt / svapnāntavad avidyamāneṣu viṣayeṣu abhimāna ity atra na hetur ucyate iti / svapnānte cāsanto viṣayā iti ko hetur iti / khyātir iti cet ayaṁ jāgradavasthopalabdhanām viṣayānām cittavyatirekiṇām asattve hetuḥ khyātiḥ svapnavad iti na, dṛṣṭāntasya sādhyasamatvāt ya evaṁ svapnāvasthāyām viṣayāḥ khyānti na te cittaviyatiriktā ity atra ko hetuḥ

因 (hetu) が存在しないから。〔汝の主張は〕成立しない (NS 4-2-33)。また夢を見ているときに対象を構想することは記憶 (smṛti) や観念の如く (saṅkalavat) 〔以前に知覚した対象に基づいている〕 (NS 4-2-34)。

〔反論〕あるいは幻、空中の想像上の都市、陽炎 (mṛgaṭṛṣṇikā) のように〔プラマーナと認識対象が構想される〕 (NS 4-2-32, NBh. p. 1087, 8)

〔答論〕〔それは正しく〕ない。プラマーナが存在しないからである。夢を見ている場合のように (svapnāntavat) 存在していない諸の対象に関して〔存在であると〕構想しているというこのことには因 (hetu) が述べられていない。また、夢を見ているときに諸の対象は存在していないということには、いかなる因 (hetu) があるのか。

〔反論〕顕現 (khyāti) が〔因〕である。すなわち〔宗〕目覚めている (jāgrat) 状態で認識されている心とは別な諸の対象が存在していない場合、〔因〕顕現 (khyāti) がその因 (hetu) (対象は顕現から生起するの) である。〔喩〕夢の如し<sup>(24)</sup>。

〔答論〕〔それは〕正しくない。喩例 (夢を見ているときの対象) には所証 (心とは別のものでないもの) と〔外界の対象の無ということにおいて〕等しい性質があるから、そのように夢を見ているとき、諸の対象が顕現している、それらは心とは別なものではないということ (主張) に関して、因 (hetu) は何であるのか<sup>(25)</sup>。

[11B (2)] 目覚めているときの無知覚は成立しない  
NV p. 1078, 8-14 *ad* NS 4-2-33 (2)<sup>(26)</sup>

pratibuddhenānupalambhān na santīti atha manyase yasmāt pratibuddhena nopalabhyante tasmān na santīti na, viśeṣaṇopādānāt ye pratibuddhenopalabhyante te santīti prāptam / vyartham vā viśeṣaṇam pratibuddhenānupalambhād iti / yadi copalabhyamānam jāgradavasthāyām svapnāvasthāyām viśayam asantaṁ manyase atha cittam astīty atra ko hetur iti / viparyaye ca sāmarmthābhāvād ahetuḥ jāgrato 'nupalabdher iti / yady upalabdhiḥ sattvasādhanaṁ tato 'nupalabdhir asattvaṁ sādhayati, viparyaye hi hetoḥ sāmarmtham dr̥ṣṭam iti /

〔反論〕目覚めた人（pratibuddha）によって認識されないから〔諸の対象は〕存在しないということは、目覚めた人によって認識されないから〔諸の対象は〕存在しないということである<sup>(27)</sup>。

〔答論〕それは〔正しく〕ない。〔汝は目覚めているときに知覚されないという〕限定詞を採用する（viśeṣaṇopādāna）から目覚めた人によって知覚されるものは存在するということが得られる<sup>(28)</sup>。あるいは目覚めた人によって〔諸の対象は〕知覚されないからという限定詞（viśeṣaṇa）は無意味である<sup>(29)</sup>。また、もし、目覚めている状態において知覚されているものを、夢の状態における非存在なる対象であると汝がみなすなら<sup>(30)</sup>、その際、心（citta）は存在するというそのことに、何の根拠（hetu）があるのか。また反対の事柄（知覚し得る存在）に関して（viparyaye）、〔因（目覚めているときの無知覚）の〕効力（sāmarmthya）が存在しないから、目覚めている人（jāgrat）の無知覚（anupalabdhi）は因ではあり得ない（ahetu）。もし、知覚（upalabdhi）が有を証明するもの（sattvasādhana）であるなら、そのことから無知覚（anupalabdhi）が非存在であること（asattva）を証明する<sup>(31)</sup>。なぜなら因（目覚めているときの無知覚）の効力は反対の事柄（知覚し得る存在）に関して（viparyaye）見られるからである。

#### 〔11B (3)〕心心所の同体別体に関する論議

NV pp. 1078, 14-1084, 7 *ad* NS 4-2-33 (3)

na cittavyatirekiṇo viśayā grāhyatvāt vedanādivad iti yathā vedanādigrāhyam na cittavyatiriktaṁ tathā viśayā api / vedanā sukhaduḥkhe, cittaṁ vijñānam iti, sukhaduḥkhābhyam cānyat jñānam ity asiddho dr̥ṣṭāntaḥ, sukhaduḥkhe grāhye grahaṇam jñānam iti grāhyagrahaṇabhāvād anyatvam / athābhinnaṁ vijñānam vedanātas tathāpi grāhyam ca gṛhītiś ca ekam iti na dr̥ṣṭānto 'sti / na hi karma ca kriyā ca ekam bhavati / athaikatvaṁ pramāṇavṛttam anapekṣya pratipadyethāḥ tathāpi catvāraḥ skandhā iti śāstravyāghātaḥ / atha catuṣṭvaṁ na pratipadyate dr̥ṣṭam vijñānamātram evābhyupagamyate so 'pi dr̥ṣṭam vijñānabhedam anuyuktavyaḥ — bāhyasyādhyātmikasya ca vijñānabhedahetor abhāvāt katham vijñānabheda iti / svapnavad vijñānabhedaṁ yadi pratipadyate, so 'pi

dr̥ṣṭānubhūtānām bhāvānām bhāvanāvaśena vijñānabhedaṁ pratipādayitavyaḥ / atha  
svapnapakṣe 'pi bhāvanābhedaḥ vijñānabhedaṁ pratipadyeta so 'pi bhāvyaabhāvakavar-  
gayor bhedena pratyavastheyaḥ, nābhinnāṁ bhāvyaṁ bhāvakaṁ ceti /

[反論]<sup>(32)</sup> (宗) 心 (citta) とは別な諸の対象は存在しない。(因) 把握対象であるから。  
(喩) 受 (vedanā) などのように<sup>(33)</sup>。例えば、受などの把握されるもの (心所) は心とは別  
のものではない (心心所同体である)、同様に諸の対象も [心とは別のものではない]<sup>(34)</sup>。

[答論、ウッディヨータカラの見解、心心所別体] 受とは楽と苦との二である。心 (citta)  
とは識 (vijñāna) である。知 (jñāna) とは楽と苦とは別であるから (心心所同体を表す) 喩  
例が成立しない。楽と苦とは認識されるもの (grāhya) であり、知は認識するもの (grahaṇa)  
である<sup>(35)</sup> (楽と苦とは別である知によって認識される) から、認識されるものと認識するも  
のとの関係によって (楽、苦と知とは) 別である (心心所別体である)。もし、識 (vijñāna)  
が受 (vedanā) と無区別であるなら、そうであっても、認識されるもの (grāhya) と認識す  
るもの (gr̥hīti) とが同一であるということには、喩例が成立しない。なぜなら、行為の対象  
(karman) と行為 (kriyā) とは同一ではない。もし、プラマナーによっておこされること  
に依存せずに汝が [心と心所とを] 同一であるとみなそうものなら、それでもなお、[精神的  
なものに] 四つの蘊があるという教理と矛盾する。もし、四つであることが理解されない (一  
蘊だけ) なら、識のみ (vijñānamātra) だけが経験されると認められる。(識のみと主張す  
る) その人は識の区別が経験されることを問われなくてはならない。また、外 (なる対象) と  
内とにとって識の区別の根拠が存在しないから、どうして [時間空間などに関して] 識の区別  
が存在しようか<sup>(36)</sup>。もし、夢のように識の区別を理解するなら<sup>(37)</sup>、(識のみと主張する) その  
人は見られ経験された諸存在の心に現われたもの (bhāvanā) によって識の区別を理解しなく  
てはならない。もし、夢の中でも心に現われたものを区別することによって識の区別を理解  
するなら、その人は心に現われたものと心に現すこととの二つのもの (bhāvyaabhāvakavarga)  
を区別して立ち向かわなくてはならない。心に現われたものと心に現すこととは無区別ではな  
い [心心所別体である]。

[12] 夢を見ているときの対象の因と対応物 (pradhāna) に関する論議

[12A] NBh. pp. 1080, 2-1085, 7<sup>(38)</sup> ad NS 4-2-34

svapnāntavikalpe ca hetuvacanam / svapnaviṣayābhimānavad (cf NS 4-2-34) iti bruvatā  
svapnāntavilalpe hetur vācyaḥ / kaścit svapno bhayopasaṁhitaḥ, kaścit pramodopasaṁ-  
hitaḥ, kaścīd ubhayaviparītaḥ, kadācit svapnam eva na paśyatīti / nimittavatas tu svap-  
naviṣayābhimānasya (cf NS 4-2-34) nimittavikalpād vikalpopapattiḥ // 33 //  
smṛtisaṅkalpavac ca svapnaviṣayābhimānaḥ // NS 4-2-34 // pūrvopalabdhaviṣayaḥ/  
yathā smṛtiś ca saṅkalpaś ca pūrvopalabdhaviṣayau na tasya pratyākhyānāya kalpete (→

kalpate) tathā svapne viṣayagrahaṇaṁ pūrvopalabdhaviṣayaṁ na tasya pratyāhyānāya kalpate (→kalpata) iti / evaṁ dr̥ṣṭaviṣayaś ca svapnānto jāgaritāntena / yaḥ suptaḥ svapnaṁ paśyati sa eva jāgratsvapnadarśanāni pratisandhatte idam adrākṣam iti / tatra jāgradbuddhivṛttivaśāt svapnaviṣayābhimāno mithyeti vyavasāyaḥ/ sati ca pratisandhāne yā jāgrato buddhivṛttis tadvaśād ayaṁ vyavasāyaḥ svapnaviṣayābhimāno mithyeti / ubhayāviśeṣe tu sādhanānarthakyaṁ / yasya svapnāntajāgaritāntayor aviśeṣas tasya svapnaviṣayābhimānavad (NS 4-2-31) iti sādhanam anarthakaṁ tadāśrayapratyākhyānāt / atasmīns tad iti ca vyavasāyaḥ pradhānāśrayaḥ / apuruṣe sthāṇau puruṣa iti vyavasāyaḥ, sa pradhānāśrayaḥ, na khalu puruṣe 'nupalabdhe puruṣa ity apuruṣe vyavasāyo bhavati, evaṁ svapnaviṣayasya vyavasāyo hastinam adrākṣam parvatam adrākṣam iti pradhānāśrayo bhavitum arhati // 34 //

また、夢を見ているときの構想に関して、原因 (hetu) を述べるのが [必要である]。夢を見ているときに対象を構想するようにと主張する者（世親）によって夢を見ているときの構想に関して原因が述べられなくてはならない。ある夢は恐怖 (bhaya) を伴い、ある [夢] は喜び (pramoda) を伴い、ある [夢] は（恐怖と喜びとの）両者を欠いている。ある時には、人は全く夢を見ない。他方、[實在としての原因に基づかずに夢を見ているときの対象を構想している唯識論者と違って] 實在としての原因（生起因 nimitta）に基づいて夢を見ているときに対象を構想していることには、實在としての原因を構想しているから構想には妥当性がある。

[ニヤーヤ学派の主張] また夢を見ているときに対象を構想することは記憶や観念の如く [以前に知覚した対象を有するものである] (NS 4-2-34)。

[夢を見ているときに対象を構想することは] 以前に知覚した対象を有するものである。例えば記憶 (smṛti) と観念 (saṅkalpa) とは以前に知覚した対象を有するものである<sup>(39)</sup>。そのことを否定することはできない、それと同様に夢を見ているときに対象を把握することは以前に知覚した対象を有するものである。そのことを否定することはできない。以上のように、また夢の中で経験する対象は目覚めている状態 [で経験したもの] によって [起こるのである]。夢を見ている眠っている人自身が、目覚めたときに夢の中で見た諸のものを私はこれを見た (adrākṣam) と思い起こす。その場合、目覚めたときの知の働きから、夢の中で対象であると考えたものは誤り (mithyā) であると決定される。また、回想 (pratisandhāna) が存在する場合、目覚めている人の知の働きが、それ（回想すること）によって夢の中で対象であると考えたものは誤りであると決定される [目覚めている時の知の働きと夢の中での知の働きとは区別される]。他方、両者は区別されないとする場合は [夢を見ている場合の認識の如しと] 証明することは無意味なことである。夢を見ているときと目覚めているときの両者に [外界の対象が存在しないという点で] 区別がないとするその者（唯識派、世親）<sup>(40)</sup> にとって、夢を見



ているとき対象を構想するように [このプラマナと認識対象とを構想する (ayaṁ pramāṇaprameyābhimānaḥ) (NS 4-2-31)] と証明することは [夢を見ているときの知も目覚めているときの知も共に誤っていることになる故] 無意味なことである。その依存するもの (原因となるもの) を否定すること (pratyākhyāna) であるから。また、それでないものをそれであると判断することは対応物 (pradhāna) に依存するのである。人でない杭 (sthāṇu) に関して人であると判断すること (vyavasāya)、それは対応物 (実在する人) に依存するのである。実際、人を知覚したことがない (anupalabdhi) 場合、人ではないもの (杭) に関して人であるという判断は存在しない。同様に夢を見ているときの対象を、私は象を見た、私は山を見たと判断すること (vyavasāya) は対応物に依存するからである [それは以前に象や山を見た経験による]。

[12B (1)] 夢を見ているときの対象と唯識無境説とに関する対応物 (pradhāna) の問題

NV p. 1084, 7-17 *ad* NS 4-2-34 (1)

ye caite svapnādipratyayāḥ puravimānodyānabhedānuvidhāyinaḥ te mithyāpratrayā itī, mithyāpratrayānāṁ ca jāgradavasthāpratrayayasāmānyād bhāvāḥ / mamāpi sarva eva mithyāpratrayā bhaviṣyantitī bruvāṇāḥ pradhānam anuyoktavyāḥ / na ca niḥpradhānam viparyayapratrayaṁ paśyāma itī / cittavyatirekiṇaṁ ca viṣayam apratipadyamānaḥ sādhanadūṣaṇasvabhāvaṁ paryanuyoktavyāḥ / yadi bāhyasvabhāvakaṁ vyāghātaḥ / atha cittasvabhāvakaṁ na cittena paraḥ pratipādyate ity artho 'sya na siddhyati, na hītarasvapnam anākhyātā itaro vijānātī / atha śabdākāraṁ cittam pratipadyate tenāpi śabdākāraṁ cittam ity ākārārthe vaktavyāḥ / ākāro hi nāma pradhānavastusāmānyād atamiṁs tad itī pratrayāḥ / na ca bhavatpakṣe śabdo vidyate itī śabdākāraṁ cittam itī nirabhidheyaṁ vākyam / cittavyatiriktaṁ viṣayam apratipadyamāno jāgratsvapnāvasthāyor bhedaṁ paryanuyojyāḥ jāgradavasthāyāṁ viṣayā na santi svapnāvasthāyām apīti iyaṁ svapnāvasthā iyaṁ jāgradavastheti kuta etat

城 (pura)、馬車 (vimāna)、庭園 (udyāna) という区別に応じた夢を見ている場合などにおける知識は、誤って知られたものであるから、また目覚めている状態での知識との類似性 (sāmānya) から [夢を見ているときの] 誤って知られた諸のものが存在する。私にとっても、全ては誤って知られたものであると述べる者は対応物 (pradhāna) について問われなくてはならない。我々是对応物なくして誤った知識を経験することはない。また心以外の対象を認めない者 (世親) は立証 (sādhana) と論破 (dūṣaṇa) の本質について問われなくてはならない。もし [立証と論破との本質が] 外界を本質とするもの (bāhyasvabhāvaka) であるなら、矛盾が存在する。もし、心を本質とするものなら、他者は心によって知られないから、その (立論と論破との) 目的は達成しない。語られていない他者の夢を別の人は知ることはないか

らである。もし、心が声の形象（śabdākāra）を有すると理解されるなら、彼によっても、心は声の形象を有するという形象の意味に関して述べられなくてはならない。なぜなら、形象（ākāra）というのは、対応物である〔外界の〕実在（pradhānavastu）との類似性（sāmānya）から、それでないものに関してそれであると知ることである。また、汝の理論においては〔心とは別でない〕声が存在するから心が声の形象をもつということは意味のない陳述である。心以外の対象を認めない人（世親）は目覚めている時と夢を見ている時との区別（bheda）を詰問されなくてはならない。目覚めている状態で諸の対象は存在しない。夢を見ている状態でも〔対象は存在しない〕から、これは夢を見ている状態である、これは目覚めている状態であるというこのことは、何に基づいているのか〔それらに区別があり得ない〕。

[12B (2)] 唯識無境説と善、不善の結果に関する論議<sup>(41)</sup>

NV pp. 1084, 17-1085, 9 *ad* NS 4-2-34 (2)

dharmādharmavyavasthā ca na prāpnoti yathā svapnāvasthāyām agamyāgamanād adhar-motpattir na bhavaty evaṃ jāgradavasthāyām api na syāt / atha nidropaghātānupaghātau bhedaṃ janayata iti pratipadyeta tad api tādṛg eva nidropaghātaś cetaso vaikṛtyahetur iti katham avagamyate atha vijñānasya spaṣṭatām aspaṣṭatām ca bhedaṃ pratipadyeta viṣayam antareṇa jñānasya spaṣṭatāspaṣṭatā ca vaktavyā /

また善（dharma）、不善（adharma）なる〔結果の〕確定が得られない。例えば、夢を見ている状態で姦通（gamyāgamana）から不善が起こることはない。そのように目覚めている状態でも〔不善が起こることは〕ないであろう<sup>(42)</sup>。

[反論]〔夢を見ている時の〕眠気（nidrā）による障害（upaghāta）と〔目覚めている時の〕不障害とが区別を起こすということが知られる<sup>(43)</sup>。

[答論] それも、まさしくそういった心（cetas）の眠気による障害が低下（vaikṛtya）の原因であるということが、どうして知られるのであるか。もし、識の明瞭さ（spaṣṭatā）と不明瞭さ（aspaṣṭatā）との区別を知るのなら、対象なしに知識の明瞭さと不明瞭さと〔の区別〕が説明されなくてはならない。

[12B (3)] 唯識無境説と知識の区別に関する論議

NV pp. 1085, 9-1086, 9 *ad* NS 4-2-34 (3)

asaty arthe vijñānabhedo drṣṭa iti cet atha manyase yathā tulyakarmavipākotpannāḥ pretāḥ pūyapūrṇāṃ nadīm paśyanti, na tatra nady asti, na pūyam / na hy ekaṃ vastv anekākāraṃ bhavitum arhati / drṣṭaś ca vijñānabhedaḥ, kecit tām eva jalapūrṇāṃ paśyanti kecit rudhirapūrṇāṃ ity ato 'vasīyate yathā dhyātme nimittāpekṣam asati bāhye nimitte vijñānam eva tathotpadyate(a) iti na, vyāghātāt asati bāhye vijñānam eva tatheti bruvā-

ṇaḥ praṣṭavyo jāyate kathaṁ tatheti / yadi rudhirākāraṁ vijñānam rudhiraṁ tarhi vaktavyaṁ kiṁ rūdhiraṁ iti / evaṁ jalākāraṁ nadyākāraṁ ca vaktavyam / pūyapūrṇaṁ paśyantīti ca vākhyasya padāni pratyekaṁ vicāryamāṇāni rūpādiskandhābhāve nirviśayāṇi bhavanti / deśādinīyamaś ca na prāpnoti, ekasmin deśe nadīṁ pūyapūrṇaṁ paśyanti na deśāntareṣu / asaty arthe niyamahetur vaktavyaḥ / yasya punar vidyamānaṁ kenacid ākāreṇa vyavasthitaṁ tasya śeṣo mithyāpratyaya iti yuktam / mithyāpratyayāś ca bhavanto na pradhānaṁ bādhanta iti pūyādipratyayānāṁ pradhānaṁ vaktavya iti / yathā pūyādipratyayānāṁ evaṁ māyāgandharvanagaramṛgatṛṣṇāsālilānām (cf NS 4-2-32) iti / karmaṇo vāsanānyatra phalam anyatra kalpyata (Vś k. 7ab) iti / asyārthaḥ yatraiva kila karma tatraiva kila phalena bhavitavyam, yasya tu cittavyaterekiṇo viśayās tasyānyatra karmānyatra phalam iti vyadhikaraṇe kalmaphale bhavata iti tan na, ana-bhyupagamāt — na mayā karmaphale vyadhikaraṇe abhyupagamyate, ātmani karma tatraiva phalam ity adōṣaḥ / madiyāc cittāt arthāntaraṁ viśayāḥ sāmānyaviśeṣavattvāt santānāntaracittavat / pramāṇagamyatvāt kāryatvād anityatvāt dharmapūrvakatvāc ce-ti // 34 //

〔反論〕対象は存在しなくとも、〔時空の限定や一人に限定されないという〕知識の区別が見られる<sup>(44)</sup>。

〔答論〕もし、汝（世親）が例えば、等しい行為の果報（異塾）を生起した餓鬼達は膿みに満ちた河を見る<sup>(45)</sup>と考えるなら、そこには河は存在せず膿みも存在しない。なぜなら、一つの事物が多なる形象をもつ（さまざまに見える）ことはあり得ない。

〔反論〕しかし、知識の区別は見られる。ある人々はその（河）を水に満たされていると見る。ある人々は〔その河を〕血に満たされていると〔見る〕から、したがって例えば外界の生起因（nimitta）が存在しない場合、内における生起因に依存している知識こそが確定される、それと同様に生起する。

〔答論〕〔それは正しいもの〕ではない。矛盾するからである。外界が存在しない場合、知識こそがそう（区別するの）であるといっていることは、どうしてそう（区別し得るの）であるのかと問われなくてはならない。もし知識が血の形象（ākāra）をもつなら、そのとき、血を説明しなくてはならない。血は何であるのかと〔心以外に発生源を認めないなら、形象はどうして起こるのかを説明しなくてはならない〕。そのように、水の形象と河の形象を説明しなくてはならない。また膿みに満たされた〔河を全ての餓鬼が〕見るという主張<sup>(46)</sup>の諸の言葉が一つ一つ吟味されるとき、色などの蘊が存在しない場合、対象をもたないこととなる。また場所などに関する限定が得られない。ある場所で膿みに満ちた河を見る。他の場所では（見られ）ない。対象が存在しないとき、〔特定の場所を〕限定する根拠が述べられなくてはならない<sup>(47)</sup>。さらにある形象で存在しているものは確定され、それ（知識）以外のものは誤った知識であるということが妥当することになる。また誤った知識が存在しているなら、〔その知識

の] 対応物 (pradhāna) を退け去ることはないから、諸の膿みなどの知識にとって、対応物 (pradhāna) となるものを説明しなくてはならない。例えば諸の膿みなどの知識にとってのように、幻、空中の想像上の都市、陽炎の水 (mṛgatṛṣṇāsālila) にとってもそうである（対応物となるものが説明されなくてはならない）から。

[世親による反論] 行為の習気のある場所と別な場所に行為の結果があると構想されている<sup>(48)</sup>。この意味は、行為が行われたそのところ（心相続）にこそ、[行為の] 結果が設けられなくてはならない<sup>(49)</sup>。他方、心以外の諸の対象が存在するという人には、行為が行われたところと別のところに結果があると異なった基体 (vyadhikaraṇa) を具えた行為と結果が存在することになる<sup>(50)</sup>。[行為とその結果は同一の基体、認識の相続 (vijñānasamṭāna) においてある。]

[答論] それは「正しく」ない。「異なった基体を具えた行為とその結果ということは」認められないからである。私は行為と結果が異なった基体を具えているとは認めない。行為はアートマンにおいてこそ行われ、そこ（アートマン）においてこそ結果があるから過失はない。

（宗）私の心とは別なものとして諸の対象は存在する。（因）一般性と特殊性を具えているから。（喩）他の相続（他人）の心のように。（因）プラマーナにより認識されるものであるから。

（因）結果であるから。（因）無常であるから (anityatvāt)。（因）ダルマを先とするものであるから<sup>(51)</sup>。

[13] 誤った認識は真実知によって退けられるが、誤った知は存在から起こり実在としての原因なし (animitta) に起こるのではなく外界の対象及び普遍相をもった対象は退けられない

[13A] NBh pp. 1087, 2-1088, 4 *ad* NV 4-2-35

evam ca sati mithyopalabdhivināśas tattvajñānāt svapnaviṣayābhimānapraṇāśavat pratibodhe // 35 // sthāṇau puruṣo 'yam iti vyavasāyo mithyopalabdhīḥ atasmimś tad iti jñānam, sthāṇau sthāṇur iti vyavasāyas tattvajñānam / tattvajñānena ca mithyopalabdhir nivarttyate, nārthaḥ sthāṇupuruṣasāmānyalakṣaḥ / yathāpratibodhe yā jñānavṛttis tayā svapnaviṣayābhimāno nivartyate nārtho viṣayasāmānyalakṣaṇaḥ, tathā māyāgandharvanagaramṛgatṛṣṇikāṇām (cf NS 4-2-32) api yā buddhayo 'tasmimś tad iti vyavasāyās tatrāpy anenaiva kalpena mithyopalabdhivināśas tattvajñānān nārthapratīṣedha iti / upādānavac ca māyādiṣu mithyājñānam / prajñāpaniyasarūpaṁ ca dravyam upādāya sādhanavān aparasya mithyādhyavasāyaṁ karoti sā māyā, nīhāraprabhṛtinām nagarasarūpasanniveśe dūrān nagarabuddhir utpadyate viparyaye tadabhāvāt, sūryamarīciṣu bhaumenōṣmaṇā saṁsṛṣṭeṣu spandamāṇeśudakabuddhir bhavati sāmānyagrahaṇāt, antikasthasya viparyaye tadabhāvāt / kvacit kadācit kasyacit ca bhāvān nānimittam mithyājñānam / dṛṣṭam ca buddhidvaitam māyāprayoktuḥ parasya ca, dūrāntikasthayor gandharvanagaramṛgatṛṣṇikāsu, suptapratibuddhayoś ca svapnaviṣaye / tad etat sarvasyābhāve

nirupākhyatāyām nirātmakatve nopapadyate(a) iti // 35 //

また、そうであるなら真実の知から、誤った認識 (mithyopalabdhī) が滅される。目覚めたときに夢を見ているときの対象を構想することが滅せられるように (NS 4-2-35)。杭 (sthāṇu) に関して、これは人であると判断することは誤った認識であって、それでないものに関してそれであると知ることである。杭に関して杭であると判断することは真実の知である。また真実の知によって誤った認識が退けられる。杭と人との共通した特徴 (普遍相 sāmānyalakṣaṇaḥ) をもった対象は「退けられ」ない<sup>(52)</sup>。例えば、目覚めたときに知の働きによって夢の中で対象を構想したことが退けられる<sup>(53)</sup>が、対象という共通した特徴 (普遍相) をもった対象は「退けられ」ないように、同様に幻、空中の想像上の都市、陽炎にとっても、それでないものをそれであると判断する諸の知がある。その場合も、上の仕方で真実の知 (tattvajñāna) から誤った認識の消滅が [もたらされるが]、対象が否定されるのではない。また幻などに関する誤った認識 (mithyājñāna) は [外界の] 質料因 (upādāna) を有するものである。また知らしめるべきものと類似している (sarūpa) 実体に依存して証明するものを具えているものが、他者に誤った間接的判断 (adhyavasāya) を設ける。それが幻である。霧 (nīhāra) を始めとする諸ものに、町に類似したものが存在している場合、遠方からは町であるとの知が起こされる。反対 (近く) の場合、それは起こらないからである。諸の太陽光線 (sūryamarīci) が大地から発した熱 (uṣman) と結合し揺らめいているとき、水 (udaka) の知覚が起こる。[揺らめいている点で水との] 共通性を把握するからである。反対に近くにいる人には、それ (水であるとの知覚) は存在しないからである [近いということが正しい知覚の条件である]。あるところで、あるときに、ある人に、誤った知は存在 (bhāva) から起こるのであって、実在する原因なし (animitta) に [起こるのでは] ない。また (1) 魔術師 (māyāprayoktr) とその他の人々 (見物人) との二種の知が知られる [前者は幻を非実在と知るが、後者は実在と思う]。 (2) 遠くにいる人と近くににいる人とは、空中の想像上の都市、陽炎に関して [前者はそれらを見、後者はそれらを見ることはない]。 (3) 眠っている人と目覚めている人とは、夢の中での対象に関して [前者は実在と思い、後者は非実在と見る]。こういったことは、すべてが非存在 (abhāva) であり、名称のないものであり、無我なるもの (nirātmakatva) であるなら<sup>(54)</sup>、起こらない。

[13B] NV pp. 1087, 16-1088, 11 ad NS 4-2-35

evam ca sati mithyopalabdhivinaśas tattvajñānāt svapnaviṣayābhīmānapraṇāśavat pratibodhe (NS 4-2-35) / sthāṇau puruṣādhyavasāyo mithyopalabdhīḥ, tattvajñānena ca mithyādhyavasāyaḥ sa nivartate, nārthaḥ sthāṇupuruṣalakṣaṇaḥ / na hy asau sthāṇur na bhavātīti yathā svapnopalabdhāṇāṃ ye 'dhyavasāyāḥ te jāgradavasthopalabdhīḥ nivartyante, nārtho viśayasāmānyalakṣaṇa (NBh. p. 1087, 8 ad NS 4-2-35) iti / śeṣaṃ bhāṣye // 35 //

また、そうであるなら、真実の知から誤った認識が減される。目覚めたときに夢を見ているときの対象を構想することが減せられるように（NS 4-2-35）。杭に関して人であるとの間接的判断が誤った認識である。また真実の知によって誤ったその間接的判断がやむ。杭と人の特徴をもった対象は存在しない。なぜなら、その杭は存在しないのではない。例えば、夢を見ているときの諸の認識についての諸の間接的判断は目覚めているときの認識によって退けられる。対象にある普遍的な特徴（普遍相）（sāmānyalakṣaṇa）をもった対象は[退けられ]ない<sup>(55)</sup>。残りは、NBh. に [明らかである]。

[14] 誤った知にも実在としての原因（生起因、nimitta）が存在する [中観派批判]

[14A] NBh p. 1088, 5-8 *ad* NS 4-2-36

buddheś caivaṃ nimittasadbhāvopalambhāt // 36 // mithyābuddheś cārthavad apratiṣedhaḥ / kasmāt nimittopalambhāt, sadbhāvopalambhāc ca / upalabhyate hi mithyābuddhinimittaṃ mithyābuddhiś ca pratyātmam utpannā gṛhyate saṃvedyatvāt, tasmān mithyābuddhir apy astiti // 36 //

また、同様に知（buddhi）には実在としての原因（生起因、nimitta）の存在が認識されるからである（NS 4-2-36）。また誤って知られたこと（mithyābuddhi）は対象の如く否定されない。

[反論] 何故であるか。

[答論] 実在としての原因（nimitta）が認識されるからである。また存在が認識されるからである。なぜなら、誤って知られたことの実在としての原因が認識される。また誤って知られたことは、それぞれの人に生起したものであると把握される。認識される性質のものだからである。したがって誤って知られたことも存在する。

[14B] NV pp. 1088, 12-1089, 9 *ad* NS 4-2-36

buddheś caivaṃ nimittasadbhāvopalambhāt (NS 4-2-36) / buddheś caivaṃ nimittasadbhāvopalambhād apratiṣedhaḥ / mithyābuddher nimittam asti / kiṃ punas tat sāmānyadarśanaṃ viśeṣadarśanam avidyamānaviśeṣādhyāropa iti / mithyābuddhiṃ pratipadyamānena tasyā nimittaṃ vaktavyam / nimittaṃ ca pratipadyamānenārtho 'bhyupetya iti // 36 //

また、同様に知には実在としての原因（nimitta）の存在が認識されるからである（NS 4-2-36）。また、同様に知には実在としての原因の存在が認識されるから否定されない。誤って知られたこと（mithyābuddhi）には実在としての原因（nimitta）が存在する（NS 4-2-36）。

[反論] また、それは何であるのか。

[答論] 普遍を見ることであり、特殊性を見ないことである。存在していない特殊性を増益す



ることである。誤って知られたことを認めることによって、[中観派によって] それには実在としての原因が述べられなくてはならない。また、実在としての原因を認めることによって対象 (artha) を認めなくてはならない。

[14B-1] NVT p. 1088, 17-19 *ad* NS 4-2-36

yas tu mādhyamiko mithyābuddhidṛṣṭāntena bāhyāpahnavam kṛtvā tenaiva dṛṣṭāntena vijñānābhāvam kṛtvā vicārāsahatvam tattvaṁ bhāvānāṁ vyavasthāpayām babhūva taṁ pratyāha buddheś caivaṁ nimittasadbhāvopalambhāt (NS 4-2-36) //

他方、中観派は誤って知られたこと (mithyābuddhi) に関する喩例 (映像など) によって外界の否定をし、その同じ喩例 (映像など) によって識 (vijñāna) の非存在を表し、諸存在の [世俗としての] 真理は吟味に耐え得ない (vicārāsahatva) と確定する<sup>(56)</sup>。それに対して答えた。また、同様に知には実在としての原因 (nimitta) の存在 (sadbhāva) が認識されるからである (NS 4-2-36)。

[14B-2] NVT p. 1089, 18-19 *ad* NS 4-2-36

so 'yaṁ mādhyamiko 'nubhūyamānāṁ mithyābuddhiṁ nāpahnotum arhati / tathā ca mithyābuddhiṁ pratipadyamānena tasyā nimittaṁ vaktavyam (NV p. 1089, 8) ity uktam // 36 //

この中観派は知覚されているものを誤って知られたことであると否定することはできない。また同様に、誤って知られたことを認めることによって、それには実在としての原因 (nimitta) が述べられなくてはならないといった。

[15] 杭を人と誤って知ることには実際の対象 (杭) と対応物 (人) との区別がある

[15A] NBh pp. 1089, 2-1090, 3 *ad* NS 4-2-37

tattvapradhānabhedāc ca mithyābuddher dvaividhyopapattiḥ // 37 // tattvaṁ sthāṇur iti, pradhānaṁ puruṣa iti / tattvapradhānayoḥ alopād bhedāt sthāṇau puruṣa iti mithyābuddhir utpadyate sāmānyagrahaṇāt / evaṁ patākāyāṁ balāketi, loṣṭe kapota iti na tu samāne viṣaye mithyābuddhināṁ samāveśaḥ sāmānyagrahaṇavyavasthānāt / yasya tu nirātma-kaṁ nirupākhyāṁ sarvaṁ tasya samāveśaḥ prasajyate / gandhādaḥ ca prameye gandhādibuddhaya mithyābhimatās tattvapradhānayoḥ sāmānyagrahaṇasya cābhāvāt tattva-  
buddhaya eva bhavanti / tasmād ayuktam etat pramāṇaprameyabuddhaya mithyeti (cf NS 4-2-31) // 37 //

また、誤って知られたことには実際の対象 (tattva) と対応物 (pradhāna) との区別があるから、二種が妥当する (NS 4-2-37)。実際の対象が杭である。対応物が人である。実際の対

象と対応物とが揃って（alopa）いて区別される（相違がある）から杭に関して人であるという誤って知られることが生起する。共通性（普遍 sāmānya）<sup>(57)</sup>を把握するからである。同様に旗（patākā）に関して鶴（balākā）であるという、土塊（loṣṭa）に関して鳩（kapota）であるという「誤って知られたことが存在する」。他方、類似した（samāna）対象「例えば牛の群」に関して「杭と人との場合のように」諸の誤って知られることが入り込むことはない。普遍（sāmānya）を把握することが確定しているからである。他方、すべてのものが無我なるもの（nirātmaka）であり、名称をもたないという者（仏教徒）<sup>(58)</sup>にとっては「普遍を認めないから類似した対象に関して誤って知られることが」入り込むことになってしまう。また香りなどの認識対象に関して誤って構想されたものである香などの諸の知は、実際の対象と対応物との二と普遍（sāmānya）の把握とが存在しないから諸の実際の対象を知ること（tattvabuddhi）だけとなる。したがって「誤って知ることはないのであるから」プラマーナと認識対象とに関する諸の知が「夢を見ているとき対象が構想されるように」誤っている<sup>(59)</sup>というこのことは不合理である。

[15B] NV p. 1089, 10-11 *ad* NS 4-2-37

tattvapradhānabhedāc ca mithyābuddher dvaividhyopapattiḥ (NS 4-2-37) / tattvaṃ sthānur iti pradhānaṃ puruṣa iti tattvapradhānāy alope mithyābuddhir bhavatīti (NBh. p. 1089, 3-4) / śeṣaṃ bhāṣye // 37 //

また、誤って知られたことには実際の対象と対応物との区別があるから、二種が妥当する（NS 4-2-37）。実際の対象が杭であり、対応物（pradhāna）が人である。実際の対象と対応物とが揃っている（alopa）場合、誤って知られることが存在する。残りはNBh.に「明らかである」。

## 結 論

ヴァーツヤーヤナは世親が唯識無境を夢を見ているときの対象の例示によって論じる Vś k. 1-3を、また自己の種子に基づく対象としての顕現を有した表象から記憶が起こるという Vś k. 17ab 及び夢を見ているときの対象と目覚めたときの対象を共に無とする k. 17cd を知っていて、その際、対象の因の存在しないことを論難し、自説を表わしている。それは以下のものである。

1. 夢を見ているときの対象は無ではなく実在である原因（nimitta）が存在し、夢を見ているときの対象は以前、目覚めているときに知覚経験した外界の対象に基づく。2. 世親によれば夢中も、目覚めているときも共に外界の対象は存在しないから、目覚めているときの外界の対象の無知覚（anupalambha）は確定されない。3. 記憶は以前に知覚した対象による。4. 誤

った知は真実の知によって退けられるが、誤った知にも根拠となる対応物 (pradhāna) が存在する。杭を人と判断する誤った知にとって杭と人との共通した特徴 (普遍相 sāmānyalakṣaṇa) をもった対象は退けられない。他方、一切法無我を主張する者は普遍を認めないから実際の対象だけを把握することになり、かえってプラマーナと認識対象とが夢を見ているときの対象のように構想されたものであるとはいえなくなる。5. 幻、空中の想像上の都市、陽炎に関する誤った認識 (mithyājñāna) は質料因 (upādāna) を有する。6. 外界の対象も識も否定する者 (ヴァーチャスパティミシュラによれば中観派) は実在としての原因 (生起因 nimitta) を認める必要がある。

7. 特にウッディヨータカラのみが指摘する世親による外界の対象の否定が成立しない根拠とは、世親は心とは別な諸の対象を認めず心心所同体論に立つが、それでは精神的なものが受、想、行、識の四種に区分されている教理と矛盾する。また夢を見ているときと目覚めているときと共に外界の対象が存在しないなら、善、不善という業果が成立しない。先に世親は眠気による業果の区別を主張していた (Vś k. 18cd)。また Vś k. 3 と Vś k. 7 との知の区別の問題に言及し、唯識無境であっても、場所の限定は夢の場合と同様に証明され、特定の人に限定されないことは餓鬼達が共通して膿みの河を見るという知識の区別の成立を論じる世親に対して、それらの知における形象の原因として外界の対象を認める必要があること、また Vś k. 7ab を引用し習気と業果との一貫性を識の相続により説明する世親に対してアートマンによるとする。

〔略号〕

Māl Kamalaśīla, *Mādhyamakāloka*, P.No.5287, D. No. 3887

NB Dharmakīrti, *Nyāyabinduḥ*, Bibliotheca Buddhica. VII. Meicho-Fukyū-Kai, 1977

NBh, NV, NVT *Nyāyadarśanam with Vātsyāyana's Bhāṣya, Uddyotakara's Vārttika, Vācaspati Miśra's Tatparyatikā and Viṣvanārtha's Vṛtti*, ed. by Nyāya-Tarkatīrtha, Taranatha and Tarkatīrtha, Amarendramohan, Calcutta Sanskrit Series, Calcutta, 1936-44, reprinted, Kyoto, 1982

PV Dharmakīrti, *Pramāṇavārttika*, 戸崎宏正 (1979) 『仏教認識論の研究』上巻

TS Śāntarakṣita, *Tattvasaṅgraha*, Kamalaśīla, TS-*pañjikā* ed. by S.D.Shastri, G.O.S.

The Vaidalyaprakaraṇa of Nāgārjuna, ed. by Yuichi Kajiyama インド学試論集、第6-7号、京都大学印度仏教学会 (1965)

VN Dharmakīrti, *Vādanyāyaḥ*, ed. by M.T.Much. Teil Sanskrit-Text. Wien 1991 P.No.5715, D. No.4218

VNV Śāntarakṣita, *Vādanyāyavṛttivipaṇcitārtha*, ed by S.D.Shastri. Varanasi. 1972. P.No.5275 D. No.4239

Vś Vasbandhu, *Vīmatikā vijñaptimātrāsiddhi*, ed. by Sylvain Levi, 1925

〔参照論文〕

梶山雄一

(1974) 『廻諍論』 [ヴァイダルヤ論] (『大乘仏典』14龍樹論集)

(1976) 『唯識二十論』 (『大乘仏典』15世親論集所収)

(1984) 「仏教知識論の形成」講座大乘仏教9—認識論と論理学

- Gaṅgānātha Jha (1983) *The Nyāyasūtra of Gautama with Vātsyāyana's Bhāṣya and Uddyotakara's Vārttika*, Indian Thought Series, 4 vols, 1915, reprinted Kyoto 1983
- 中村 元 (1976) 『ニヤーヤとヴァイシェシカ思想』中村 元選集 [決定版] 第25巻
- 戸崎宏正 (1979) 『仏教認識論の研究』上巻 (大東出版社)
- 本田 恵 (1999) 『ニヤーヤ経註』(平楽寺書店)
- 森山 (2012) 世親、ヤショミトラとヴァーツヤーヤナ、ウッディヨータカラ—部分の集合論と全体 (avayavin) 論一、『法然仏教の諸相』藤本浄彦先生古稀記念論文集刊行会 [編] pp.(1)-(32)
- (2014) ダルマキールティ、シャーントラクシタとウッディヨータカラ—avayavin を巡って、*Vādanyāya* とその注釈 (VNV) との和訳研究—『仏教学部論集』第98号
- (2015a) 世親の『唯識二十論』『俱舍論』(上)、『仏教学部論集』第99号 pp. 1-27
- (2015b) 世親の『俱舍論』『唯識二十論』とヴァーツヤーヤナ、ウッディヨータカラ、印仏研 No.63 -2
- (2015c) 世親の『俱舍論』『唯識二十論』とニヤーヤ学派 (ヴァーツヤーヤナ、ウッディヨータカラ) —全体および原子の結合論—、小澤憲珠名誉教授寿記念論集『大乘仏教と浄土教』pp. 87-113
- 山上証道 (1999) 『ニヤーヤ学派の仏教批判』(平楽寺書店)

〔注〕

- (1) 森山 (2014) (2015a) (2015b) (2015c) (2) 梶山 (1984) pp. 48-49 (3) 森山 (2014) p. 3, NV *ad* NS 4-2-12 (4) [8b-1] [9b-1] NVT p. 1076, 17-23 *ad* NV 4-2-30, 31 (5) cf PV III (94) *aniścayakaraṃ proktaṃ idṛkṣānupalambhanam / tan nātyantaparokṣeṣu sadasattāvinīścayau* // こういった (知覚し得ないものの) 無知覚は確定をもたないものであると述べられた。したがって、諸の超感覚的なものに関しては存在と非存在との何れの確定もない。(6) cf VS p. 6, 29-30 *na tāvad ekaṃ viśayo bhavaty avayavebhyo 'nyasyāvayavirūpasya kvacid apy agrahaṇāt* / まず、単一なもの (全体) は対象ではない。諸部分とは別な全体というものは決して把握されないからである。(7) cf VS p. 8, 22-25 *ad* k. 16ab *pramāṇavaśād astitvaṃ nāstitvaṃ vā nirdhāryate sarveṣāṃ ca pramāṇānāṃ pratyakṣaṃ pramāṇaṃ gariṣṭham ity asaty arthe katham iyaṃ buddhir bhavati pratyakṣam iti pratyakṣabuddhiḥ svapnādau yathā* (VS k. 16ab) [反論] 存在性あるいは非存在性はプラマーナによって確定される。またあらゆるプラマーナのうちに直接知覚のプラマーナが最も重要である。したがって、対象が存在しない (唯識無境である) とき、どうしてこの知が直接知覚であることになろうか。[答論] 直接知覚による知は夢などの場合のように起こる (VS k. 16ab)。(8) ナーガルジュナの *Vaidalyaprakaraṇa* 14, 15 にもプラマーナと認識対象とが存在しないから、この否定はなんであるのかというという対論者による詰問が見られる。それに対してナーガルジュナは否定されるものが存在しない場合にも、否定対象を表現してから否定すると答えている。梶山 (1965) pp. 138-139, (1974) p. 196 (9) [9A] NBh. *ad* NS 4-2-31から [12A] 34 夢を見ているときの対象は非実在 (誤り) → 誤った知の根拠 (hetu) が存在しない、根本としての原因 (pradhāna) が無い、これは唯心批判 VS kk. 1-3。(10) [12A] NBh. *ad* NS 4-2-34 では夢を見ているときと目覚めているときの両者に区別がないとするその者 (世親) にとって、この偈 [9A] (NS 4-2-31) の前半が主張されたとしている。またヴァチャस्पティミシュラは NS 4-2-31を Vijñānavādin (唯識派) による [8A] NS 4-2-30に対する反論とする。NVT p. 1076, 17-18 [8B-1] [9B-1] (11) cf VS k. 17cd *svapnadṛgviśayābhāvaṃ nāprabuddho 'vagacchati* // 17cd // 目覚めていない人は夢を見ているときの対象の非存在を理解しない。(12) cf *pratyakṣabuddhiḥ svapnādau yathā* k. 16ab [世親による答論] 直接知覚という知覚は、ちょうど夢などにおいて [非実在な外界の対象を認識する] ようである。VS kk. 1-3 において、表象のみであり対象は存在しなくとも、夢の如く時間空間の確定があると論じられているから、プラマーナと認識対象とを夢の中での構想に等しいと世親によっても主張されていると見られる。(13) 同様な喩例により外界の対象の非存在を論じるものは『摂大

乗論』2.6などに見られる。cf Vś p. 3,14 *ad* k. 2 *gandharvanagara* 空中の想像上の都市 (14) NBh. p. 1076,8-9 *ad* NS 4-2-31 [9A] (15) cf Vś p. 9,13-14 *ad* k. 17cd *evaṃ vitathavikalpābhyāsavāsanānīdrayā prasupto lokaḥ svapna ivābhūtam arthaṃ paśyan na prabuddhas tad abhāvaṃ yathāvan nāvagacchati* / そのように、真実ではない概念構想を反復し習気という眠りによって眠り込み、夢を見ているときのように真実でない対象を見ていて、目覚めていない世間の人々はそれが非存在であることを、あるがままに理解しない。 (16) cf Vś *ad* 17cd., [9A] [10 A] NBh. p. 1076, 8-9. [8B] [9B] [10B] NV p. 1076, 14 *ad* NS 4-2-31 (17) cf NS 4-2-31 (18) cf Vś k. 17cd (19) cf Vś k. 17cd [cf 撰大乘論2.6] (20) cf Vś k. 17cd (21) cf [11B (2)] NV p. 1078, 13 *ad* NS 4-2-33 (2) *yady upalabdhiḥ sattvasādhanaṃ tato 'nupalabdhir asattvaṃ sādhayati* 換質换位の関係を最初に自覚したのはディゲナーガとされ、ヴァーツヤーヤナには明白なその自覚はなかったようである。cf 北川秀則『インド古典論理学の研究』pp. 40-41 NBh. pp. 26, 4-27, 3 *ad* NS 1-1-1 *evaṃ pramāṇena sati grhyamāṇe tad iva yan na grhyate, tan nāsti yady abhaviṣyad idam iva vyajñāsyata, vijñānābhāvān nāstīti / tad evaṃ sataḥ prakāśakaṃ pramāṇam asad api prakāśayati* / そのように、プラマーナによって存在が認識されているとき、それと同様に認識されないものは存在しない。もし、これが存在する場合、知られるように、知られることがないから存在しない。したがって以上のようにプラマーナは存在を明らかにするものであり、無をも明らかならしめる。 (22) cf PV III (94), NB 2-49 (23) cf NBh. p. 26, 2-4 *ad* NS 1-1-1 *katham uttarasya pramāṇenopalabdhir iti sati upalabhyamāne tadanupalabdheḥ pradipavat / yathā darśakena dipena dr̥ṣye grhyāmāṇe tad iva yan na grhyate, tan nāsti / yady abhaviṣyad idam iva vyajñāsyata, vijñānābhāvān nāstīti* / どうして、後者(無)がプラマーナによって認識されるのであるか、というのは存在しているもの(有)が知覚されている場合、それ(有)が知覚されないこと(anupalabdhi)から[無が認識される]。灯火のように。例えば、照明するものである灯火によって知覚され得るものが把握されている場合、それと同様に把握されないものは存在しない。もし、これが存在するなら知られるように、知られることがないから存在しない。 (24) Vś p. 9,4-5 *uktaṃ yathā tadābhāsā vijñaptiḥ* (k. 17ab1) *vināpy arthena yathārthābhāsā cakṣurvijñānadikā vijñaptir utpadyate tathoktam / smaraṇaṃ tataḥ /* (k. 17 b2) ちょうど、その(対象)の顕現をもった表象が現れるようにと述べた (k. 17ab1)。対象がなくとも、ちょうど対象の顕現をもった眼識などの表象が生起すると同様であると述べた、それから記憶が起こる (k. 17b2) cf Vś k. 9ab *yataḥ svabijād vijñaptir yadābhāsā pravartate* その自己の種子から[対象の]顕現をもった表象が生起する。種子→顕現=表象、種子生現行。 (25) cf Vś k. 9ab (26) cf NBh. p. 1078,2-6 *ad* NS 4-2-33 (2) (27) cf Vś k. 17cd 注(11) (28) cf [11A (2)] NBh. p. 1078, 2 *ad* NS 4-2-33 (2) *pratibodhaviṣayopalambhād apratiśedhaḥ /* (29) cf Vś p. 9,8-11 *ad* k. 17cd *yadi yathā svapne vijñaptir abhūtārthaviṣayā tathā jāgrato 'pi syāt tathaiva tadābhāvaṃ lokaḥ svayam avagacchet / na caivaṃ bhavati / tasmān na svapna ivārthopalabdhiḥ sarvā nirarthikā /* [世親に対する反論] もし例えば、夢を見ているときに表象が真実な対象をもたない、それと同様に目覚めている人にも[表象が真実な対象をもたない]なら、全く同様に世間の人々は自らそれ(外界の対象)が存在しないことを理解しよう。しかし、そういうことはない。したがって、夢を見ているときのように、すべての対象を認識することが対象をもたないのではない。 (30) cf Vś p. 9,13-16 *ad* k. 17cd *evaṃ vitathavikalpābhyāsavāsanānīdrayā prasupto lokaḥ svapna ivābhūtam arthaṃ paśyan na prabuddhas tadābhāvaṃ yathāvan nāvagacchati / yadā tu tatpratipakṣalokottaranirvikalpajñānālābhāt prabuddho bhavati tadā tatpr̥ṣṭhalabdhaśuddhalaukikajñānasarīmukhibhāvād viṣayābhāvaṃ yathāvad avagacchatīti samānam etat //* そのように真実でない概念構想の反復による習気の眠りによって眠っていて夢を見ているときと同じように非真実な対象を見ていて、まだ目覚めていない世間の人々は真実のままにそれ(外界の対象)が存在しないことを理解しない。他方、それとは反対に出世間の概念構想を離れた知を得ることから目覚めた者となるそのとき、その後には得られる清浄な世間的な知が眼前に存在するから、対象が存在しないことをあるがままに理解するというこ



のことは「夢から目覚めた場合」と同じである。(31) cf PV3-94, NB 2-49 [11 (A) (2)] NBh. p. 1078, 4-5 upalambhāt sadbhāve saty anupalambhād abhāvaḥ siddhyati (32) 唯識派 (cf NVT p. 1076,18., p. 1078, 17 vijñānavādin., p. 1081,10) の見解、心心所自体 (33) NVT .1078,17-18 atra vijñānavādi svapakṣe pramāṇam āha na cittavyatirekiṇo viśayāḥ grāhyatvād vedanāvad iti / その場合、唯識学派が自らの主張においてプラマナを述べる。(宗) 心とは別な諸対象は存在しない。(因) 把握対象であるから。(喩) 受などの如し。(34) Vś p. 3,1-3 *ad* k. 1 cittamātram bho jinaputrā jinaputrā yad uta traidhātukaṁ iti sūtrāt / cittam mano vijñānaṁ vijñaptiś ceti paryāyaḥ / cittam atra sasaṁprayogam abhipretaṁ / mātram ity arthapratīṣedhārthaṁ / おお、勝者の息子達よ、実際、三界は唯心であると経典に説かれている。心、意、識、表象というのは同義語である。この場合、結合した心（心、心所）が意図されている。のみ（唯）というのは「外界の」対象を否定するためである。(35) cf PV III (255) yatasyārthasya nipātena te jātā dhisukhādayaḥ / muktṛvā taṁ pratipadyeta sukhādin eva sā katham // 対象が近在することによってそれらの知や楽などが生起する。それ（知）はそれ（対象）を離れて、まさしく楽などを知りえようか。(36) Vś k. 2 yadi vijñaptir anarthā niyamo deśakālayoḥ / saṁtānasyāniyamaś ca yuktā kṛtyakriyā na ca // もし表象が「外界の対象に基づかないなら」、時間と空間との限定、及び相続に限定がないこと、また作用のあることは不合理である。(37) Vś k. 3ab deśādinīyamaḥ siddhiḥ svapnavat 場所などの確定は夢を見ているときのように成立する。(38) NBh. p. 1080,2-5（この部分はテキストでは NS 4-2-33 の注釈とみなされているが、NS 4-2-34の導入と見た方が適切と考えられる）(39) cf Vś p. 9, 3 *ad* k. 17ab asiddham idam anubhūtasāyārthasya smaraṇaṁ bhavati / 知覚した対象を記憶するというこのことは成立しない。(40) Vś p. 9, 13-14 *ad* k. 17cd evaṁ vitathavikalpābhyāsavāsānānidrayāprasupto lokaḥ svapna ivābhūtaṁ paśyan na prabuddhas tadabhāvaṁ yathāvaṁ nāvagacchati (41) ウッディヨータカラによる世親の唯識無境説への論難 原子批判に対するもの、唯心に関するもの、夢と目覚めているときとの無区別に関するもの (42) cf Vś p. 9,23-25 *ad* 18cd yadi tathā svapne nirarthikā vijñaptir evaṁ jāgrato 'pi syāt kasmāt kuśalākuśalasamudācāre suptāsuptyayasya tulyaṁ phalam iṣṭāniṣṭam āyatyān na bhavati もし、目覚めている人にも、夢を見ている時と同様に、表象が対象をもたないということであるなら、何故に善、不善を行った時、眠っていても目覚めていても、未来に願われたあるいは願われないという等しい結果が生起することはないのか。(43) cf Vś k. 18cd middhenopahataṁ cittam svapne tenāsamaṁ phalam 夢を見ている時は、心は不活発さにより妨げられている。したがって、「目覚めている時とは」異なった結果が生起するのである。(44) cf Vś k. 3ab deśādinīyamaḥ siddhiḥ svapnavat, 場所などの限定は夢を見ているときのように証明される。Vś p. 3,21 *ad* k. 3ab siddho vināpy arthena deśakālanīyamaḥ 対象はなくとも場所と時間の確定は成立する。(45) cf Vś p. 4, 3-4 *ad* k. 3bcd tulyakarmavipākāvasthā hi pretāḥ sarve 'pi pūyapūrṇaṁ nadiṁ paśyanti naika eva / なぜなら等しい行為の異熟を受けている状態にあるすべての餓鬼達は膿みに満ちた河を見る。一人だけが「見るのでは」ない。(46) cf Vś k. 3bcd pretavat punaḥ / saṁtānānīyamaḥ sarvair pūyana-dyādidarśane // また餓鬼のように、特定の個体に限定されない。すべての「餓鬼」によって膿みの河が見られる場合 (47) cf Vś p. 3, 8-10 *ad* k. 2 yadi vinā rūpādyarthena rūpādivijñaptir utpadyate, na rūpādyarthāt / kasmāt kvacid deśa utpadyate, na sarvatra / もし、色などの対象がなくて色などの表象が生起するなら、色などの「外界の」対象から「生起するのでは」ない。何故にある場所で生起して、すべての場所で「生起するのでは」ないのか。(48) =Vś k. 7ab karmaṇo vāsānānyatra phalam anyatra kalpyate / (49) cf Vś k. 7cd tatraiva neṣyate yatra vāsānā kim nu kāraṇaṁ // その際、何故に習気があるその同じところに「行為の結果があると」認めないのか。(50) cf Vś p. 5,13-15 *ad* k. 7 yatra vāsānā nāsti tatra tasyāḥ phalam kalpyata iti kim atra kāraṇaṁ 習気がない「別な」ところにその結果が構想されるということにいかなる根拠があるのであるか。(51) cf TS prameyatvādihetubhyaḥ santānāntaracittavat / āntarānubhavād bhinnam deśavicchedabhāsi cet // 2056 // TSP p. 702, 21-23 *ad* TS 2056 prameyatvādihetubhya



ityādinoddyotakarasya pramāṇānyāśaṅkate / sa hy āha yad etad deśavicchedapratibhāsi  
 nilādikaṁ tad āntarānubhavād bhinnam prameyatvāt, anityatvāt, kāryatvāt, pratyayatvāt,  
 hetumattvāt, yathā santānāntaracittam iti // 2056 // [ウッディヨータラカラによる反論] 諸の  
 認識対象性などの因から他の相続 (他人) の心のように場所の区別の顕現は内なる知覚とは別な  
 ものである (TS 2056)。諸の認識対象性などの因から云々によってウッディヨータラカラの別  
 のプラマナに [シャーンタラクシタは] 疑念を抱く。なぜなら、彼 (ウッディヨータラカラ)  
 は次の通り述べる。この場所の区別の顕現を有した青などのものは内なる知覚とは別なものであ  
 る。認識対象という性質をもつから、無常なる性質をもつから、結果という性質をもつから、知  
 識という性質を有するから、原因を有するから、例えば、他の相続 (他人) の心のように。  
 atrāpi vyabhicāritvaṁ svarūpeṇāsya cetasaḥ / tathāpi taddvicandrād yair asvasthanayane-  
 kṣitaiḥ // 2057 // この (因の) 場合も、この心にとって本性という点で逸脱性 (TSP p.702, 24  
 anaikāntikatvam) がある。同様に不健康な眼をもった人によって見られたその二重の月などか  
 らも [逸脱性がある]。D No.4266. 75a4 'dir yaṁ 'khrul pa ṇid yin te // sems de raṁ gi ṇo bo  
 daṁ // de bshin mig nad las byuṁ ba 'i // zla ba gñis la sogs kyis 'khrul // TS では、このウ  
 ッディヨータカラの論難に対してのみならず、外界の対象の考察章全体を通じ世親の Vś と同様、  
 原子 (paramāṇu)、全体 (avayavin) を含め外界の対象の非存在を論じ、唯識無境を立論してい  
 る。TSP 2057 では不定因であり外界の実在を証明し得ないことを PV III (1) keśādir nārtho  
 'narthādhimokṣataḥ (髪等は対象ではない。対象であると確信できないから。) を根拠に論じて  
 いる。(52) cf NBh. pp. 234, 4-240,3 ad NS 1-1-23 samānadharmopapatter viśeṣāpekṣo vimar-  
 śaḥ saṁśayaḥ iti / sthānupuruṣayoḥ samānaṁ dharmam ārohaṇāyati, tadanavadhāraṇaṁ  
 jñānaṁ saṁśayaḥ / samānam anayor dharmam upalabhe viśeṣam an-yatarasya nopalabha ity  
 eṣā buddhiḥ apekṣā — saṁśayasya pravarttikā varttate, tena viśeṣāpekṣo vimarśaḥ saṁ-  
 śayaḥ / 共通した性質が起こっているものにとって疑惑とは特殊性に依存している思考である。  
 杭と人とは、共通した性質すなわち高さや幅とを見ていて、また以前に見たその両者の特殊性  
 を知ろうとしている人が、何れであろうかと決定できないその確定のない知が疑惑である。この  
 両者 (杭と人) に共通した性質を私は認識する、何れか一方の特殊性を私は認識しないというこ  
 の依存しあっている知が疑惑を起こすものである。それ故、疑惑とは特殊性に依存した思考であ  
 る。(53) cf Vś k.17cd (54) cf [15A] NBh. ad NS 4-2-37 (55) cf NBh. p.1087, 8 ad NS 4-  
 2-35 (56) cf MAK 1, 64 (57) 太い直立したもの、山上 p.360 (58) cf [13A] 最後部『廻諍論』  
 9 梶山 (1974) p.144 (59) cf NS 4-2-31

(もりやま せいとつ 仏教学科)

2015年11月16日受理